2011年度　　J

国　　語

注　意

1. 問題は全部で10ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ○ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が イ のとき)

1	●	㋺	㋩	㋥	㋭	㋬	㋣

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章は西郷信綱の著書『古代人と夢』についての書評である。読んで、後の問に答えよ。

「古代人」の夢を問題とすることによって、著者は、それを生きられる世界の基礎とする文化ないし精神の構造が、いかに現在の私たちと異なるものであるかを取りだしてみせる。その世界の成り立ちの違いが、「古代人」と私たちとを分かつものだ。こうして夢を「文化形式の［　1　］構造」とする、異質な世界の質感が粒立つとき、そこに「精神史」が作動しはじめる。[1] 通時的にだらだらと叙述される観念史と、それは真っ向から対立するだろう。

ここで「古代人」とはあらかじめ存在する人々ではない。夢を信じていた人々という仮設のもとに、それが含みもつ「世界連関」の構造的かつ多面的な解析が、一つの現実としての古代人の世界を差しだすのである。その差しだしかたは、ほとんど［　A　］に救い出すといってもよいものだ。既存の制度的現実という壁に塗りこめられた物事の「意味」を救出するために、事柄の一側面ないし構造の一角、ときには語彙の一用例に対する分析が、その方法的な楔のように打ちこまれるのである。

こうして取りだされた古代人の文化形式において、「夢に見る」ということの、他の何ものかにカンゲン[a]できない独自性とその「確かな経験」としての衝撃力が、繰りかえし強調される。その強調は、「現実が夢を模倣し再生産することだって大いにありえたはずである」ような、そういう「現実」の在りかたに対する注目の集中を促すのである。

このような指摘は、いかにも唐突に思えるかもしれないが、私につぎのような文章を想い出させる。現代ロシアの幻想文学者でありタクバツ[b]な批評家でもある人物のものだ。

《現実とは芸術の［　2　］構造なのである。芸術の外で、芸術なしでは、現実それ自体には特に何の中身もなければ、何の価値もない。だからこそ芸術は定期的に、時には社会の法則や意志に反してまでも、繰り返し姿を現わし、自分の存在を思い出させるのだ。地中からめらめら燃え出る火焔のように。そして生命の根源として。また、歴史とは本当は何か、自然とは何かを思い出させるために。》（アンドレイ・シニャフスキー）

一見奇矯に思えるこの文学者の言葉は、夢に見るという経験が開示する「世界連関」について西郷氏が傾けた知見と、符合するところがないだろうか。現実を再生産する「［ 3 ］構造」としての力は、生命の根源として「大地と夜」に属する夢、豊穣と再生をもたらすべく「地中から燃え出る」ような夢の働きを想わせる。また法則や意志に反して芸術がその姿を現わすさまは、夢見が帯びる「他者性」を想わせるだろう。そうであればこそ、夢は神的啓示でもあれば他界との交通路でもありえたのだ。それよりも何よりも、再生を希求すべく人間の経験の根源におりたとうとする、その精神の眼差しの向けかたにおいて、それは共振するのではないか。

しかし符合ないし呼応はここまでである。夢の［ 4 ］構造としての働きが、そこで生きられる世界が「本当はどういうものか」を思い出させるようなものとして、私たちにやって来ることは、もはやない。生命の根源として世界へと通じる夢の回路は、どこかで塞がれてしまったのである。それはどこか。［ B ］私たちの「現実」が、夢が孕む世界連関を思い出させることがないとすれば、その方法は、著者がいうように「昔を想い出すことが忘れていた今を想い出すことであるような、そういう想い出しかた」、すなわち想起にもとづくだろう。

夢をめぐる精神史的な事件は平安朝において生じた、と著者は指摘する。和泉式部の有名な歌、「物思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞみる」に、物思いのうちに砕ける「魂の散乱状態」を読みとるとき、たしかに著者とともに「精神史として、これは決して小さな事件ではない」ことを、[2]私たちは身にしみて思い知らねばならないはずである。すなわち、私たちが手放した世界とはどのようなものであり、それによって、忘れているどのような「今」を想起すべきなのだろうか。

それは、ほかならぬ「あくがれ出づる魂」をめぐる事態である。つまり魂の他者性ということだ。ここで私たちは、夢において像化される魂の弁証法的な運動というべきものに出会うことになる。

《魂は自己のなかに住む他者である。したがって危機に臨むとそれは我にもあらずあくがれ出でもするが、同時に聖所のねむりに訪れる夢において、それはしばしば自己が自己を超越するという奇跡をも実現する。回心とは考えること、思惟することに

よってではなく、このように(夢に)見ることによって信が炸裂するのをいうのではないか。》

[3]自己とは他者が生棲する場所なのだ。他者を抱えこみ、あるいは他者性に貫かれていればこそ、この自己は「内面性」という名のもとに閉塞してしまうことはない。自己とは他者の意識である、というだけでは充分ではない。それはたえず他者へとひらかれているだけでなく、時あればあくがれ出てしまう運動状態のもとにある。その魂は内面として所有しうるどころか、自己の統制を越えて「我にもあらず」動きだすのである。何ごとかの夢を「持つ」のではなく、「夢に見る」という古代人の決定的な経験が教えるのは、そこに生成するヴィジョンをつうじて、いわば他者性と相互性、さらには共同性への回路をもつ魂のこのような運動なのである。

『古代人と夢』の著者がいうとおり、[4]覚醒は眠りの対立概念ではない。睡眠中の眼としての夢、すなわち他者へとひらかれた魂の眼としての夢がもつ「世界連関」が、広くかつ深いものであればあるほど、その諸要素は深々とした覚醒の契機となりうるのである。著者の分析は、古代人の夢の世界を静力学的に明らかにすることではなく、その文化形式がもちえた世界と精神の諸連関を忘却のなかから救い出すことに向けられている。この古代研究の説得性と包みあう面白さは、おそらく、このようなアクチュアリティ(現実性、現代性)にもとづいている。

著者が仮設しその中身を充実させていった「古代人」の文化と、その [5] 構造としての「夢」の諸要素は、私たちの「現在」のうちにそっくり投げ込まれるべきものと思える。その異質さは異質なままに、つまり他者として抱えこまれるべきものと考える。より深い覚醒のための夢の在りかた、それをこそ私たちは想起すべきなのだ。

(市村弘正『小さなものの諸形態』による)

問一　波線部a「カンゲン」、b「タクバツ」をそれぞれ漢字で記せ。

問二　傍線部1「通時的にだらだらと叙述される観念史と、それは真っ向から対立するだろう」とあるが、こうした「観念史」に対して「精神史」の書き手はどのような点で違っているか。文章全体を読んだ上で最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　自らの解釈を差し挟むことなく客観的に歴史を書く能力のみならず、すぐれた文章力と想像力とが要求される。

イ　古代人が自分たちとは違う感覚で生活していたことを、当たり前のこととして全く疑っていない。

ウ　古代日本人と現代日本人とは歴史的に連続しているという前提をもたないかぎり過去を記述できない。

エ　古代人の精神、古代人の世界なるものを示した史料など存在していない以上、創作意識が必要である。

オ　過去を単に振り返るのではなく、現代の精神のあり方に対する危機感から別の精神のあり方をつかみとろうとする。

問三　[A]に入る語として最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　批判的　　イ　感情的　　ウ　論理的　　エ　観念的　　オ　批評的

問四　[B]にはどのような内容が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　実はだれもが知っている場所なのだ。

イ　精神史の出番であろう。

ウ　ロシアの文学者はそれを示そうとしたのだ。

エ　どれほど悔やもうとも取り返しはつかない。

オ　歴史家は常にその場所を示そうとしてきた。

問五　傍線部2「私たちは身にしみて思い知らねばならないはずである」とあるが、なぜか。その理由として適切ではないものを次のア～オからひとつ選び、記号をマークせよ。

ア　歴史上のある時点で生命の根源へと通じる夢を見失ったことは、現代人の生にとって深刻な事態であるため。

イ　現実が夢を除外し、意識の働く範囲に自らを限定してから、現代人の現実は貧しいものになったため。

ウ　過去の精神の他者性に注目することは、それを通して現代人が何を失ったのかを思い出すことに通じるから。

エ　古代人もまた価値として現代に劣らない豊かな文化をもっていたことを、率直に認めるべきだから。

オ　古代人の夢のあり方を想起することは、過去の問題にとどまるのではなく、とりもなおさず今に関わる問題だから。

問六　傍線部3「自己とは他者が生棲する場所なのだ」とあるが、どういうことか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　人間はかつて共同体のなかで生きてきたのだから、現代人も本質的には「他者」を思いやる性質を失っていない。

イ　グローバル化が進展した結果、もはや外国人を全くの「他者」として拒否することはできない。

ウ　自分の仲間として認めたくない「他者」が、かえって自分のためになっているということがありうる。

エ　自己の内には、自分の意識で統制できない「他者」的な部分が多様な形で存在している。

オ　自己や自文化の内に、「他者」の異質な文化を取り入れることが、より豊かな生を約束する。

問七　傍線部4「覚醒は眠りの対立概念ではない」とあるが、どういうことか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　深い眠りこそが覚醒時の理知と感性とを明晰かつ判明なものたらしめる。

イ　脳は眠っている間も活動しており、前日の記憶を主な材料として豊かな夢をつくりだす。

ウ　夢において自己意識の枠付けを越えた世界へとひらかれた精神は、より深く広い認識へと目覚める。

エ　夢の持つリアリティは、時として目覚めてみる現実のリアリティを超えることがある。

オ　人が未来への夢を失わなければ、覚醒はただ単に現在の現実を認識することにとどまらない。

問八　筆者はこの文の全体にわたって「上部構造」と「下部構造」という一対の比喩を使っており、そこに、「上部構造」はその土台である「下部構造」に支えられてこそ成り立っている、という意味をこめている。[1]～[5]には「上部」と「下部」のどちらが入るか。「上部」はアを、「下部」はイを、それぞれマークせよ。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今は昔、遍照寺僧正寛朝といふ人、仁和寺をもしりければ、仁和寺の破れたる所、修理せさすとて、番匠どもあまたつどひて作りけり。日暮れて、番匠ども、おのおの出でてのちに、今日の造作はいかほどしたるぞと見むと思ひて、僧正、中結うちして、高足駄はきて、杖つきて、ただ一人歩みきて、あがるくいども結ひたるもとに立ちまはりて、なま夕暮に見られけるほどに、黒き装束したる男の、烏帽子引きたれて、顔たしかにも見えずして、僧正の前に出で来て、ついゐて刃をさかさまに抜きて、ひきかくしたるやうに、もてなして居たりければ、僧正、「かれは何者ぞ」と問ひけり。男、片膝をつきて、「わび人にはべり。寒さの堪へがたくはべるに、その奉りたる御衣、一つ二つおろし申さむと思ひたまふるなり」と言ふままに、飛びかからむと思ひたる気色なりければ、「事にもあらぬ事にこそあんなれ。[1] かくおそろしげにおどさずとも、ただ乞はで、けしからぬ主の心ぎはかな」と言ふままに、ちうと立ちめぐりて、尻をふたと蹴たりければ、蹴らるるままに、男かき消ちて見えずなりにければ、やはら歩み帰りて、坊のもと近く行きて、「人やある」と高やかに呼びければ、坊より小法師、走り来にけり。

僧正、「行きて、火ともして来よ。ここにわが衣剥がむとしつる男の、にはかに失せぬるが、［A］ければ見むと思ふぞ。法師ばら、呼び具して来」とのたまひければ、小法師、走り帰りて、「御房、ひはぎにあはせたまひたり。御房たち、参りたまへ」[2]と呼ばはりければ、坊々にありとある僧ども、火ともし、太刀下げて、七八人、十人と出で来にけり。

「いづくに盗人はさぶらふぞ」と問ひければ、「ここにゐたりつる盗人の、わが衣を剥がむとしつれば、剥がれ[3]ては寒かりぬべくおぼえて、尻をほうと蹴たれば、失せぬるなり。火を高くともして、隠れたるかと見よ」とのたまひければ、法師ばら、「をかしくも仰せらるるかな」とて、火をうちふりつつ、上ざまを見るほどに、あがるくいの中に落ちつまりて、えはたらかぬ男あり。「かしこにこそ人は見えはべりけれ。番匠にやあらむと思へども、黒き装束したり」といひて、のぼりて見れば、あがるくいの中に落ちはさまりて、みじろぐべきやうもなくて、倦んじ顔つくりてあり。逆手に抜きたりける刀は、いまだ持たり。それを見つけて、法師ばら、寄りて、刀もとり、腕とを取りて、引きあげておろして、率て参りたり。

具して坊に帰りて、「今より後、老法師とて、なあなづり [B]。いと便なきことなり」と言ひて、着たりける衣の中に、綿のあつかりけるを脱ぎてとらせて、追ひ出してやりてけり。

（『宇治拾遺物語』による）

（注）＊しり…管理すること。　＊番匠…大工。　＊中結…衣を引き上げて、腰のあたりで帯で結ぶこと。
＊高足駄…歯の高い履き物。　＊あがるくい…足場。　＊かれ…お前。　＊やはら…ゆっくりと。
＊坊…僧坊。　＊ひはぎ…追い剥ぎ。

問一　傍線部1「事にもあらぬ事にこそあんなれ」の意味として最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　よくあることのようだ。
イ　普通のことではないようだ。
ウ　大したことではないようだ。
エ　めったにないことのようだ。
オ　このままではいられないようだ。

問二　[A] に入る最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　あやし
イ　をかし
ウ　さびし
エ　かなし
オ　おそろし

問三　傍線部2「参りたまへ」についての説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　「参り」は御房たちから僧正への敬意。「たまへ」は小法師から御房たちへの敬意。

イ　「参り」は御房たちから僧正への敬意。「たまへ」は御房たちから小法師への敬意。

ウ　「参り」は小法師から御房たちへの敬意。「たまへ」は小法師から僧正への敬意。

エ　「参り」は小法師から僧正への敬意。「たまへ」は小法師から御房たちへの敬意。

オ　「参り」は小法師から御房たちへの敬意。「たまへ」は御房たちから僧正への敬意。

問四　傍線部3「れ」の意味は何か。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　完了

イ　可能

ウ　自発

エ　尊敬

オ　受身

問五　B　に入る語としてもっともふさわしい一語は何か。ひらがな一文字で答えよ。

問六　この文章のタイトルとしてふさわしいものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　寛朝の冷酷な人柄。

イ　寛朝のとてつもない力。

ウ　寛朝の権力者としての顔。

エ　盗人の巧みな計略。

オ　盗人のすばやい行動。

問七　『宇治拾遺物語』と同じジャンルの作品を、次のア～オから一つ選び、記号をマークせよ。

ア　方丈記
イ　平家物語
ウ　大鏡
エ　今昔物語集
オ　東関紀行